ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

　布団に入ったものの、俺は中々寝付けなかった。

　今頃、あいつ等はどうしているだろうか。

　あいつは、今何をしているのだろうか。

　寝ているのだろうか。それとも俺を探しているのだろうか。さっき読んだラノベでは、主人公の母親は、心配のあまり眠れない日がずっと続いていた。ラノベの登場人物と現実の登場人物を一緒にするのは間違っているのは理解しているが、それでも重ねずにはいられない。

　それに――

「ねえ、友絆」

　思考の闇に身を任せようとしたところで、日ノ下の声が聞こえてきた。どうやら、寝付けないのは彼も同じらしい。

「……なんだ？」

「明日はさ。どうするの？」

「そうだな……」

　ほんと、どうしようか。

「いや、家に帰るかどうかも勿論だけどさ。学校は行くの？」

　……あ、やっべ。

「全然考えてなかったわ……どうしよう？」

　そう言いつつも、実はもう答えは出ていた。

　というか、選択肢の選びようが無い。

「……明日も休むよ。先生には、風邪だって言っておいてくれ。まあ、もう伝わっているかもしれないけどな」

「……そう」

「悪いな。だけどさ、教科書とか何も持ってきていないし、学校へ行く前に家に取りに戻るのも何かな」

　平常を保っているようだが、どこか悲しそうな雰囲気を匂わせる声を発した日ノ下に、俺はそう言う。勿論、理由はこれだけでは無いのだが。

　家出をしたことは、きっと学校の『ワルキューレ』に所属している奴には既に知れ渡っているだろう。そんな中、まさか大手を振って校内を歩くわけにもいかない。白い目を向けられるのは確実だろう。

第一、樹葉と顔を合わせ辛い。

「友絆はさ、どうするつもり？」

「そうだな……」

　家出の件に関して追求しているのは、言葉にされなくとも分かった。

　しかし、それはまだ懸案事項のままであり、どうすればいいのか分からないのだ。

　適当に謝って、ハイ終わり、というのは余りにも不誠実というものだろう。

「……どうすればいいと思う？」

　思わず、そう聞いてしまった。

　本当なら、これは俺が一人で解決すべき問題なのに。

なんだか自分が嫌になる。

日ノ下は、俺の質問に暫く何も答えなかった。聞かれても困る質問だろうし、無理もない。

それでも、少しだけ待つと、静かな声が聞こえてきた。

「友絆はさ、どうしたいの？」

　俺の問いに返されたのは、俺への問い。

「『どうしたい』……か」

「うん。『どうするの』の前に、『どうしたい』が大切じゃないかな？」

　そう言われて、今度は俺が静かになる。

　暗闇の中、沈黙が辺りを支配する。

　俺は目を閉じていた。

それは決して寝るためでは無く、考えるため。

グルグルと回る思考に、俺はひたすら身を委ねていた。

俺自身は、一体どうしたいのだろうか。

そして、やがてゆっくりと口を開く。

「……帰りたい、かな。と言うか、ちゃんと謝って、その上で帰りたい」

　自分の気持ちに向き合って、最初に思った事が、これだったのだ。

　まだ答えの出ない問題はあるけど、少なくとも自分の気持ちくらいははっきりしたかもしれない。

「凄く怒られるかもしれないけど、それでも『ごめんなさい』の一言くらいは言いたい。それで追い出されることになったとしても……そう言ったのか言わないのかじゃ、全然違う気がする」

「……そう。なら、そうすればいいんじゃないかな？」

「ああ。そうするよ。それが一番、いい気がする」

「友絆。さっき友絆はさ、『追い出されるかも』なんて言っていたけど、そうはならないと思うよ」

「……なんでだ？　どうしてそう言い切れる？」

「だってさ。家族じゃん」

　家族、か。

　日ノ下は、俺が普通の中学生だと思って、こう言っているのだろう。自分と同じように両親がいて、こんな感じの一軒家に住んでいる、普通の中学一年生だと。

だから、この言葉は、傍から見れば説得力の欠片も無いのかもしれない。

　だが、俺はそうは思えなかった。

　それはきっと、俺があの三人を、きちんと自分の家族と認めているということなのだろうと思う。きっと俺は――

「そう、かもな。どうなるか分からないけど、きちんと会って、謝ってみるわ」

「うん。それがいいと思う。頑張れ」

「ああ。でも、なんか悪いな」

　俺がそう言うと、プクゥっと膨れた音が聞こえた。

「友絆。それ、九回目」

　何のことだろう？

　そう思うと、それを読み取ったのか、すぐさま日ノ下が答えをくれた。

「今日だけで、もう九回も謝ってるよ。そこは、『ありがとう』でいいんだって」

「……なる程。『ありがとう』か」

　言われてみると、今日一日中、謝りっぱなしだったかもしれない。

　いや、もっと言えば、あの三人に『ありがとう』と言ったことが今までにあっただろうか？　一度も無いとは言わないが、極端に少ない気が……

　俺ってほんと、ダメなやつだな。

　眠りに落ちながら、俺は心の中で溜息を吐いた。

「じゃあ、お世話になりました」

　次の日の朝。俺は玄関で、日ノ下と日ノ下の母親に頭を下げた。父親がいないのは残念だが、仕事で五時半には家を出るらしい。

　ちなみに今は七時半。日ノ下はいつも、この時間に登校すると言っていたので、その時間に俺も合わせた。

　日ノ下の母親は、もう大丈夫なのか、と言いたそうな顔をしていたが、俺の決意は伝わったようだ。心配そうな顔をにじませながらも、ちゃんと見送ってくれている。

　俺は、両親の顔を知らない。だが、もし日ノ下の両親のような人が俺の父親や母親だったら、きっと自分にとって、凄くありがたい存在になっていたのではないだろうか。

　そう思える程に、俺はこの家の人達に感謝しているのだろう。

「じゃあ、学校の方には風邪って伝えておいてくれ」

「分かった。そうしておくよ」

「なんかすまな……ありがとう」

　昨日は日ノ下にああ注意されたが、癖になってしまったのか、すぐには直らない。

　それでもちゃんと意識して改善したことが嬉しいのか、日ノ下の表情は柔らかい。そしてどういう訳か、日ノ下の母親も俺を見て微笑んでいた。

　俺はもう一度日ノ下の母親にお礼を言って、日ノ下と一緒に家を出た。

　そして、分かれ道に差し掛かる。片方は学校へ。片方はマンションへと続く道だ。

「じゃあ、一旦はここでお別れだね。大丈夫？」

「ああ。また明日。もうお前の家には泊まりにはいかないから、心配すんな」

　そう言うと、日ノ下は苦笑する。一体どうしたのかと思ったが、そこで俺はようやく、自分が結構失礼な事を言ってしまったことに気がついた。

「ああ、いや違う。そういう意味じゃ無くてだな……」

　慌てて弁明すると、日ノ下は手を横に振る。

「いや、分かってるよ。でも気が向いたら、また来てくれると嬉しいね。うちはいつでも歓迎するからさ」

「あ……ああ。ありがとう」

　お、今度はすんなりとお礼の言葉が出てきた。

　それが何だか嬉しくて、俺は笑う。日ノ下も笑顔だった。

　俺がやることをやった後、はたしてこの笑顔が皆の中にも出来るだろうか。

　少しだけ不安だ。でも、きっと大丈夫だと思う。

　こうして俺達は、それぞれの道を歩き出した。

　そう決意したのはいいが、実際に行動に移すのは難しい。

　何となく気まずくて、俺はマンションの近くまで行けないでいた。俺は今、日ノ下と会ったあの土手に座り込んでいる。

　目の前を流れる川のせせらぎを聞きながら、俺は思考を纏めていた。どう謝罪すればいいのか、考えていたのだ。

　ここは平謝り一択のような気もするのだが、それはなんかズルい気がする。かと言って、本心から申し訳無いという気持ちを表すにのに、軽い感じで謝るのは少々真面目さに欠ける気も……

　どうすべきか。これでは、また日ノ下の家に逆戻りになってしまう。

「いやいやいや。それだけは絶対ダメだ」

『心配するな』と言った手前、こんな所で躓いている暇は無い。

　まずは、ちゃんと考えよう。昨日の夜も考えたが、こうして一人になった今、自分がどう思っているのか、それを分かろう。

　まず、俺はもう一度『ワルキューレ』に戻りたい。

　そして、出来ることなら樹葉達がいるあのユニットに戻りたい。あいつ等と一緒にいたい。そう思っている。

　ならこれを、素直に三人に伝えればいいのではないだろうか。

　よし、そうするか。

　そう思って立ち上がろうとした、その時だ。

「こんな所にいたのですか？」

　そんな声が後ろから聞こえ、俺は一瞬固まりながらも、思わず土手からずり落ちる勢いで振り向いた。昨日、日ノ下に同じように声を掛けられた時も、ここまで驚かなかったはずだ。

　最後にその声を聞いたのは何時だったか。確か、今年の初めだったか。久しく、その声を聞いていなかった気がする。懐かしさで、思わず視界が滲んでしまった。

　だが、正直、今一番聞きたくない声だ。

「……お姉様」

『ワルキューレ』のリーダー、篠崎縁ことお姉様が、車椅子に座って土手の上から俺を見下ろしていた。

　そしてその後ろでは、木藤さんが、表情の読めない顔で俺を見つめている。

　居心地の悪さを感じた俺は、思わず二人から目を逸らしてしまった。

　目の見えないお姉様は、常に瞼を閉じている。にも関わらず、何故か物凄く視線を感じたのだ。対照的に、目の見えるはずの木藤さんの視線をあまり感じないのは、彼が俺に配慮してくれているのか否か。助かるけど。

　ここから今すぐ逃げ出したいのは山々だが、それを実行に移したが最後、俺が『ワルキューレ』に戻りたいという望みが叶えられることは、永遠に無くなってしまうだろう。

　木藤さんに車椅子を押してもらいながら、お姉様は俺の所まで下りてきた。

「いい音ですね……まさに、春の音、といった所でしょうか」

「音……ですか？」

　俺の隣で、お姉様はそう呟いた。いまいち意味が分からなくて、俺が思わず、震える声で聞いてしまうと、クスリと笑みをこぼした。

「ええ、そうよ。ほら、耳をすませば、聞こえてこない？　フナの水辺を鳴かせる音や、メジロの歌う声が」

　お姉様に倣って自分も目を閉じてみるが、全く分からない。川はいつも通りのせせらぎを立て、鳥の歌う音も聞こえなかった。

「……すいません。全く聞こえないです」

「ふふふ。なら毎日注意して聞いてみるといいわ。きっと、だんだんと違いが分かってくるから」

「そう……ですか？」

　とても、そうは思えなかった。正直、お姉様が聞こえているのは、彼女の類稀なる聴覚のお陰だと思うのだが……凡人の俺が、その域に達せる自信はこれっぽちも湧いてこない。

　と言うか、お姉様はこんな話をされにきた訳では無いだろう。

「あ……あの」

「どうして、出ていこうとしたのですか？」

　自分から切り出そうと思ったら、お姉様の方から先に言われてしまった。

　さっきまで微笑んでくださっていたのが、少しずつ薄れていくのがちょっと怖い。

　何となく出鼻をくじかれてしまった感じがした俺は、暫く口篭ってしまった。

　そう言えば、俺は何で出ていこうと思ったのだろうか。

「えと……勢い、ですかね？」

　そう言ってみたものの、多分違う気がする。

　それは、俺の方を向くお姉様の顔が、先程とは打って変わって真面目なものから崩れないことからも分かった。

「あ、いえ……正直、分からないです」

　暫く逡巡した俺は、考えた事を素直に答えることにした。言ってしまった後で、怒られるかなと思い、思わず目を閉じる俺。

　だが、予想していた怒号は、いつまで経っても飛んでこない。代わりに、何かを含んだように吃った、そんな音が聞こえる。

　恐る恐る目を開けると、驚いた事にお姉様は俯いてはいるが、クスクスと笑っていたのがはっきり見て取れた。

「あ……あの、お姉様？」

「ふふ、ごめんなさい。ちょっと、昔の自分を思い出してしまって」

　どういうことだろう。

　首を傾げていると、お姉様は口を開く。

「私もね、昔、家出をしたことがあるの」

　驚いて声が出ないとは、このことだ。

　俺の中でお姉様という存在は、完璧超人に近いものである。

　家出とか、そんなこととは無縁の存在だと思っていた。正直、作り話ではないかと一瞬疑ってしまった程だ。

　だが、それが嘘でないことは、自分の方を真っ直ぐ向いているお姉様から容易に分かった。

「随分と昔のことよ。そうね……あれは、私が高校生の時だったかしら」

　寂しい風が頬を撫でる中、懐かしむようにお姉様は語りだす。

「今まで映っていた景色が突然見えなくなって……今まで普通に動いていた足の感覚が突然なくなって、勿論最初はショックでしたけど、でもそれをずっと我慢してきたの。いえ、我慢してきたと思っていたのかしら。

　でも、それも限界が来て……ある日突然、何だか喚き散らしたくなっちゃってね。周りの皆に当たった挙句、絵里と一緒に家を飛び出しちゃった」

「わ……喚き散らす？」

　イメージと合わない単語に、俺は思わず口を挟んでしまう。

　お姉様はクスリと笑って、頷かれた。

「そう。大切な人の顔が見えなくなって、自分の行きたい場所に一人で行けない。そんな自分に、イライラしちゃったのかもしれない。でも……爆発しちゃった理由は、実はまだ自分でもよく分かっていないの」

　優しい口調のお姉様に、俺は思わず顔を背けてしまう。なんだか自分の家出と、お姉様の家出を比べると、自分の方が子供っぽい気がしたのだ。

「で、ちょっとして落ち着いたら、何だか自分のしたことが途方も無く馬鹿みたいに思えてしまって……絵里は何も言わずに私が『行きたい』って言った所に連れて行ってくれて、それが何だか申し訳なくて……」

　そう言いながら、その様子を思い出したのか、少しだけ悲しそうにお姉様は語り続ける。

　俺は、それを黙って聞いていた。

　木藤さんは、語り続けるお姉様をジッと見つめている。自分のいない頃の話だから、木藤さんも興味があるのだろうか。

「お姉様は、どうやって帰ったんですか？　どのようにして……皆の所に戻ったのですか？」

　俺は、ついそう聞いてしまった。どうしても知りたかったのだ。

　だが、俺が期待したような返答は、お姉様は返してはくださらなかった。寧ろ、

「ロランはどうして、帰りたいのですか？」

　逆に質問をされてしまい、俺は答えに詰まる。

「……あいつ等と一緒にいたい。そう思ったからです」

　さっきまでずっとそのことを考えていたのに、いざ声に出したこの言葉は、どういう訳か声は凄く小さい。

　それでもちゃんとお姉様には聞こえたのだろう。

「どうして、一緒にいたいと思ったのですか？」

　自分の言葉に返ってきたのは、またも質問だった。

「どうして……って？」

「言葉の通りです。どうして、ロランは彼女達と一緒にいたいのですか？」

『どうして』の部分の語気を強めて、お姉様は再度俺に尋ねてきた。

「そ……それは……」

　そう呟きながらも、俺はハッとなる。

　そう言えば、どうして俺は皆と一緒にいたいのだろうか？　友達だと思っていた奴に裏切られて、それでもどうして俺は皆と一緒にいたいと思ったのだろう？

　また裏切られる。そんな風に考えはしなかったのだろうか？

「……いや」

　不思議と、そうは思えなかった。あいつ等は俺を裏切らない。そんな確証があったのだ。

　その理由を自分自身に問い詰め、それが思いの外すんなりと出てきた自分に戸惑いと呆れ、そして軽蔑を感じながらも、俺は口を開く。

「自分がしてしまった事の償いをしたい……『俺が』一度は見捨ててしまった人達と、もう一度やり直したいから。

　自分でも最低な事を言っている、自分勝手な理由で側にいたいと考えている、そう思いますけど……」

　もしかすると、凄く怒られるかもしれない。『二度と来るな』と言われるかもしれない。

でもここで嘘を吐いたら、それこそ俺が『ワルキューレ』にいる資格は無いだろう。

俺は、皆を裏切ってしまったのだ。仲間のピンチを無視して自分の目的を優先した挙句、感情のままに刀を振るってしまった。

きっとあの時、俺は自分の仲間を見捨ててしまったのだ。

それでも、あいつ等は俺を助けに来てくれた。それが打算とか周りの目を気にしてだとか、そんなものじゃ無いのは俺でも分かる。

マルクスさんの言っていた『謝らなきゃならない相手』があいつ等。レイ、樹葉、詠に対してだと言ったのは、そういうことだったのだ。こんな俺でも、多分まだあいつ等は『仲間』と見てくれている。

支えてもらったなら、今でも支えてくれるなら、俺は謝罪して、目一杯支え返す。

それが『仲間』でいるために、これからも仲間で居続けるために必要なことだろう。

これは俺のエゴだと思う。でも、これが俺のはっきりとした気持ちだった。

「俺の味方でいてくれる人に、少しでもその恩を返したい。これが俺の『皆と一緒にいたい』理由です」

　そう言って俺は、ギュッと目を閉じる。正直に答えておいて難だが、叱られるかもと思うと怖かった。

　もしかしたらビンタの一つでも貰うかも知れないと覚悟するも、いつまで経っても怒声の一つも飛んでこない。

　代わりに、俺は腹部を引っ張られるように前に倒れ込んだ。慌てて目を開けるも、視界は真っ暗なまま。ただ、ちょっと暖かく柔らかい感触が顔を覆っている。

お姉様に抱きしめられていることに気づくまでに、暫く時間が掛かった。

「……っ？　あ、あのっ、お姉様っ？」

　くぐもった声でそう叫ぶと、お姉様はそっと、俺の頭に手を乗せた。

　これは新手の叱り方か？　そう思っていたが、やがて乗せられた手がゆっくりと自分の頭を撫で始めた。

「……？」

　どう考えても、これは叱られている様な感じでは無い。

　もしかして、俺は今、俗に言う『いいこいいこ』をされているのだろうか？

「……なら、それを素直に、彼女達に伝えてきなさいな」

　なんて疑問が浮かんだ時、優しい声が上から聞こえて来る。

　鼓膜を震わせる心地よい鼓動を感じながら、その手から伝わる優しさに、俺は再び目を閉じていた。